第 97 回ベルギー研究会（ブリュッセル大会）発表要旨

移民ミュージアム「MMM」の活動と目的

中條健志（東海大学）

本発表では、2019 年 10 月 12 日にモレンベークに開館した移民ミュージアム MigratieMuseumMigration（以下、MMM）の活動と目的を、同館の理念、設立の経緯および所蔵品の分析をつうじて明らかにする。そこでは、発表者がこれまでに調査をおこなったフランス語圏の移民ミュージアム二館、すなわちフランスの国立移民史博物館（以下、MHI）とルクセンブルクの移住資料センター（以下、CDMH）を比較材料として提示する。

ブリュッセルにおける移民労働者の歴史をテーマとしたミュージアムであるが、そこでは通史的というよりもむしろ、移民の個人史に焦点があてられた研究がおこなわれている。これは、国立の施設として創設された MHI（2007 年開館）の方向性に近いが、市民団体のイニシアティヴによってつくられた MMM は、市民参加によって運営されているという点では CDMH（1993 年開館）に近い活動形態をもっている。

これら二館からみると後発となる MMM が、その活動と目的にどのような特徴と課題があるのかを示したい。

フランス・マゼレールの作品と生涯

吹田映子（自治医科大学）

フランス・マゼレール（Frans Masereel, 1889-1972）はブランケンベルヘで生まれ、ヘントで教育を受けた版画家である。第一次世界大戦が勃発して以降スイスに次いでフランスを居住地とし、没後ヘントに埋葬されるまで母国に定住することがなかったため、ベルギーの芸術家としてはあまり認知されていない。反戦・平和運動の担い手でもあった彼の活動はドイツをも拠点に加えた国際的なもので、木版画を中心とする彼の作品は存命中ヨーロッパだけでなくソ連や中国でも展示され、画集や挿絵本は世界各地で求められた。こうした出版物を介して彼の作品は戦前の日本でも一部の左翼知識人の間で人気だったが、弾圧の強化に伴って認知の機運は潰えてしまった。それでもロマン・ロランの小説『ジャン・クリストフ』の挿絵を通してマゼレールの作品に触れている人は少なくない。本発表ではマゼレールがどのような人物で、どのような作品を生み出したのかを改めて整理し、彼の全体像に迫りたい。

幕末明治期の開港地横浜における外国人社会とベルギー人－「ジャパン・パンチ」に見られる「ベルギーいじり」について

後藤加奈子（リエージュ大学）

「ジャパン・パンチ」は、英国人画家ワーグマンが開港場・横浜で 1862 年から 25 年間、断続的に発行した風刺画雑誌である。

「パンチ」が愛読されていた環境は外国人居留地 foreign settlement と呼ばれ、主に外交官や商人たちが行き交う特殊な地域だった。

「パンチ」では、対日政策をめぐりフランス、ドイツ、ロシアなどが頻繁に茶化されており、ベルギー関連のジョークと解釈できる風刺画も見受けられる。

「パンチ」に収められた絵やテキストの総数が 2500 頁分であると概算すると、これまでに調査できた中で、合計 30 頁分に当たる枚数がいわゆる「ベルギーいじり」に費やされていることがわかった。本発表では、「パンチ」内の「ベルギーいじり」に注目し、1867 年から 1884 年頃までの「横浜のベルギー人」の描かれ方を観察するとともに、公文書とは異なる視点から当時の息吹を伝える風刺画の在り方についても考えたい。